

むかし。

若者が三人、連れ立って旅に出ました。野を越え山越え、行くが行くが行くと、大きな門がまえの家の前に出ました。そこは、長者どのの家でした。見ると、門の前に高札が立っていて、こう書いてありました。

うちのひとり娘に、三国一の婿どのがほしい

三人は、

「はて、これは耳よりな話だ。おれたちも、婿になれないか試してみよう」といって、中へ入って行きました。

長者どのは、三人を並べて座らせて、いいました。

「これはこれは。あなたがたは、いずれおとらぬりっぱな若者だ。だれを婿とも決めかねる。うちには東の田が千刈、西の田が千刈、前の田が千刈あるから、それぞれたがやしてみてくれ。一番早くたがやした者を、婿に決めよう」

三人は、

「わたしこそ、婿になりましょう」といって、三十人なべにご飯をいっぱい炊いてもらって、三人でけろけろつとたいらげて、それぞれの持ち場を決めて、田をたがやし始めました。ところが、普通の人なら十日はかかる千刈田を、この若者たちは、ぼつつぼつつと掘りかえして、たった一日でたがやしてしまいました。そして、三人のうち、だれが早いとも遅いとも決めることができませんでした。

長者どのは、

「さてさて、あなたがたの仕事ぶりにはおどろいた。みな、いずれおとらぬ若者で、だれを婿とも決めかねる。ついては、しばらくうちに泊まって、働いてみないか」といいました。三人は、ふたつ返事で承知して、この家の下男としてはたらくことにしました。

ところで、かんじんの娘は、いっこうに姿を見せませんでした。たまにちらっと見かけても、後ろ姿ばかりです。三人の若者は、気になってしかたがありませんでした。

ある晩のこと、三人のうちのふたりが、何とかして娘の姿を見たいものと相談して、屋敷の奥にこっそり忍びこみました。娘の部屋をのぞいてみると、部屋のすみで、娘が、真っ白い着物を着て、髪を乱して、何かしていました。やがて、娘は、床板を一枚外し

て、床下から白木の棺桶かんおけのようなものを取りだしました。そして、にかにかと笑いながら、棺桶の中から、生まれたばかりの赤ん坊ぼうの死体を取りだしました。ふたりが、恐いこわもの見たさで、息を殺して見ていると、娘は、包丁ほうちようで、赤ん坊の腕うでをつねからだぎんと切つて、にたにたと、さもおいしそうに食べ始めました。そして、こちらをふり返ると

「そこで見ている殿とのがたにもさしあげましょうか」といって、血のたれている赤ん坊の腕を、にゅつと突き出しました。

ふたりは、びつくりしたのなんの。

「婿どころか、こんなおつかない所にはいられない」とさけんで、部屋にかけもどりました。そして、もうひとりの若者に訳わけを話して、その夜のうちに、ふたりは、逃げ出しました。

残った若者は、

「よし、それなら、おれが見とどけよう」と、娘の部屋をのぞいてみました。すると、真っ白い着物を着て乱れた髪かみの娘が、血のしたたる赤ん坊を頭からばりばりと食べていました。若者はびつくりしましたが、よく見ると、赤ん坊は、もちで作った人形にんぎょうでした。血と見えたのは紅べにがらでした。若者は、これならおらにも食えると思つて、ふすまをからつと開けると、

「あねさま、あねさま。おらにもその片足かたあしを食わせてくれ」といいました。娘は、

「あら、よくおっしゃってくださいました。今まで、何人も何人も婿むこになりたいという人が来たけれど、わたしの姿をひと目見るなり、びつくりして逃げるばかり。ひとりとして度胸どきょうのある人はいませんでした。あなたこそ、わたしの夫おつとになる人です」といいました。そして、白い着物を脱ぬぐと、目も覚めるような美しい娘になりました。

長者おおやうじのとも大喜こひびで、にぎやかに結婚けっこん式しきをあげました。さてそののちは、子どもも生まれて、孫子まご末代まつだいまで栄さかえたということです。

どんどはらえ

村上郁再話

資料『昔話研究2』